

ジェイコのこと

渡島医師会
国立病院機構八雲病院

石川 幸辰

札幌医科大学同期の藤井美穂先生から、原稿執筆の依頼がありました。藤井先生、大変御無沙汰しております。もう、卒後、39年になりますね。

表題のジェイコですが、「先生の恋人ですか？」など言われそうですが、実は、正式には、Jayco 211RB (排気量 6800cc、燃料容量 230l、BONANZA社)のCクラスのキャンピングカーです。平成7年購入ですから、すでに25年経ちます。この購入には、あるエピソードがあります。官舎で、当時、4歳の長男、家内と川の子で寝ていました。いつものように、家内と患者さんのこと、病院の運営などで夜中の1時から、言い争いになりました。偶然、小生が、腹這いで寝ていた長男の左膝窩をなぜか時、固い腫瘤が触れました。何らかの腫瘍性病変、骨肉腫など想起され、冷や汗がでました。朝の4時に、恩師である院長の南良二先生に診てもらいに伺いました。何らかの骨由来の軟部腫瘍らしい(悪性もありうる)、札幌医大整形外科の助教授が専門と言われ、長男、家内は朝6時のJRで札幌に向かいました。南先生からの紹介の電話もあり、すぐ診察していただき、MRIの予約をとりました。当時は、機器が混んでおり、1週間くらい先となりました。その週末に、帰札のおり、キャンピングカーのフェスティバルがありました。見ているうちに、カナダ製のキャブコンが欲しくなりましたが、家内の「たかちゃんが左脚を失うかもしれない、この車で日本中の行きたいところに連れていきたい、Jaycoがいい」となり、即、購入しました。3シーズンほど官舎の横に駐車し、息子とお泊まり会をしましたが、結局、どこにも連れて行くことはありませんでした(ひどい親です)。診断の結果は、左膝窩由来のガングリオンで、穿刺して治癒しました。

その後は、春から秋に、八雲に移駐し、来町の南先生や神戸大学からの初期研修医達とワインを飲んで歓談しました。そのJaycoとのお別れの時がきました。当院が、今年8月に、札幌の北海道医療センターに機能移転するからです。手放すことになりました。本当に、一期一会でした。来年3月で、定年退官となりますが、最近、「一期一会」がここにしみみます。

最後に、恩師 南良二先生、学問の師、北海道大学旧癌研生化学の牧田章、谷口直之両先生、米国 Tulane 大学生化学 Yu-Teh Li, Su-Chen Li 両先生には、この人生でお会いでき、大変、感謝しております。現在、その長男は、新米弁護士として横浜で働いております。

心残り

函館市医師会
西堀病院

其田 美穂

母は幼いころに函館大火を、青春に第二次世界大戦を経験し、夫に先立たれてからは女手一つで私を育ててくれました。二度にわたる圧迫骨折で外出困難となってからはかかりつけ医での訪問診療を利用、2012年に私が函館に戻って2人で暮らすようになってからは、さまざまな支援を受けながら日々を過ごしていました。

母が左拇指の痺れと脱力を訴えたのは2019年1月2日のことでした。徐々に痛みや脱力範囲が拡大し、かかりつけ医を受診。最終的に頸椎症の診断となりました。ただ、左頸部にリンパ節腫脹を認めていたことに母は引掛かっていました。またMRIでTh 1にintensity異常指摘あり1ヵ月後の再検査を促されるも、撮影時の疼痛が著しく再検は希望しませんでした。内服調整を試みるも改善なく、左胸部にわたる痛みと倦怠感で、不眠に加え摂食困難となってしまう、入院しフェントステープ導入とリハビリを行い軽快、日中独居困難のためショートステイ専門施設に退院しました。当初全介助だったトイレ動作が何とか自立できるまでに回復したこともあって表情は明るくなりました。ショートステイでは訪問診療を断念せざるを得ず、通院動作で痛みが誘発されることに苦痛を感じていたものの、この生活が気に入ったから、と他の施設申し込みを取り止めました。しかし7月頃から再度痛みが増強し、8月のCTで左肺尖部のPancoast腫瘍を指摘と連絡を受けました。1月の時点で癌を疑っていた母は、私が恐る恐る告知しても、「何だ、やっぱりね。そんな顔しなくても大丈夫だから」と却って私を慰めていました。延命措置を希望しなかった母は、入院や放射線治療の勧めを断り「ここで急変したら迷惑が掛かるから」と訪問診療再開と看取りが可能な施設への転居を希望しました。すでに摂食困難で顔色が悪く肩で息をしていた母の様子に、申し込んだ介護付有料老人ホームでは「ちょうど2人部屋が空いたので、そこで良ければ」と快く急ピッチで引き受けていただきました。そして引っ越し当日のバイタルチェックで初めて、SpO₂が70%台に低下していることを知りました。フェントステープ増量に加え酸素投与とジアゼパム坐薬での鎮静が開始となり、転居してわずか2週間後の9月28日に91歳で永眠しました。

お世話になった方々への感謝の一方、私の判断の甘さや介護制度の狭間で母に余計な苦痛を与えてしまったことが今も強く悔やまれます。